

投資地としての植民地の價值

高岡熊雄

近代の初め歐洲諸國の行つた植民政策は、成る可く速に植民地の資源を利用し依つて生ずる利益を獨占しやうとしたのであつた。彼の西班牙が新大陸に於て植民地を設けると盛んに鑛山の採掘をなし、且つ植民地貿易を國家自から獨占した。葡萄牙も亦同様に東洋貿易を獨占した。和蘭は植民地貿易を以て國家の獨占事業となさなかつたが、此の權利を自國の特許植民會社に附與した。其の後佛蘭西起りて、加奈陀其の他の地方に於て植民地を設け、續て英吉利が先進國の經驗を利用して植民政策を樹てた場合にも、等しく植民地の資源を利用して母國の富を増加するのを以て最も重要な目的となした。

而して此の目的を達する爲めに當時歐洲諸國が採つた手段方法は種々あつたが、其の内の主なるものを述べれば、(一)植民地に在る先住民族と不合理極まる物質の交換をなしたり、彼等に強制的勞働を課したり、或は強制的生産をなさしめたりした。極言すれば土人の財産を掠奪したことである。(二)は植民地よりして多額の貴金屬を歐洲に輸入したことである。今此等の方法の總てに就きて茲に詳述するは紙葉が許さないから第二の方法に就いてのみ少しく述べることにする。

## 二

近代の初め歐洲諸國が貴金屬を獲得する爲めに、植民地を利用したる方法及び其の結果を述ぶる前に、先づ世人が極めて重要視したる貴金屬の當時歐洲に於ける供給状態はどうであつたかと云ふことを一瞥する必要がある。一言に言ひ現すときは中世紀の末頃の歐洲諸國は一時非常に貴金屬の缺乏を感じた時代であつた。是れ當時コンスタンチノープルの勢力が頗る強大であつて、租税の徴收等種々なる方法に依つて歐洲よりしても多額の貴金屬を此等の地に吸収した其の上に地中海の東海岸に於て西歐洲人とアラビヤ人との間に盛んに行はれた貿易に於て西歐洲への輸入は常に輸出を超過し、貿易の帳尻は貴金屬を以て決済しなければならなかつたらである。例へばベニス港を経て外國に輸送した貴金屬の額のみでも決して少なくなき、十五世紀頃同港よりしてアレキサンドリアに向けて輸出した額は年々少なくとも三十萬デユカーテン（約百五十萬圓）に上つたと云ふことである。此の金額は當時の經濟状態より考ふるときは決して小額ではない。斯くして遂に當時西歐洲諸國にて貴金屬の缺乏を告ぐるに至つたのである。之れに反して小亞細亞・埃及・アラビヤ等の地方にては、貴金屬の供給が豊富となりて其の價値の低落を見るに至つたと言ふ。嘗てペツシエル<sup>(1)</sup> Pechelが「文化は常に東方より西方に進み金銀は常に西方より東方に流る。」と言つたことがあるが能く此の間の情勢を説明して居る。

(1) Sombart, W., *Der Moderne Kapitalismus*, 1. Aufl. Bd. I, S. 360.

斯くの如く中世紀時代に西部亞細亞地方に吸集せられた多額の金銀も、近代に入りて歐洲諸國の文化が發達するに伴ひ再び此の地に歸り來つた。加ふるに新大陸の發見せられて後は、多額の金銀が植民地よりして歐洲

に輸入せられ、又亞弗利加の如きも歐洲に對する金銀の供給地となつた。斯くして歐洲に於ける金銀は次第に増加して貨幣價值の下落を來し物價の騰貴を促すに至つた。斯る現象は既に一五〇〇年頃から現はれ始めて、貨幣價值の如き一五三〇年と一五六〇年とを比較すれば三分の二となり、一六〇〇年頃には二分の一となつた。随つて物價は七十年間に三倍に騰貴したと云ふ。ダヴネル D'Avensel の調査に依れば、一八九〇年の貨幣購買力を一となすときは其の以前の購買力は次の如くであつて、如何に貨幣購買力が十五世紀以來著しく減少したかを示す。

一四五一年—一五〇〇年	六	一五〇一年—二五五年	五
一五二六年—	四	一五五一年—七五五年	三
一五七六年—一六〇〇年	二・五	一六〇一年—二五五年	三
一六二六年—	二・五	一六五一年—七五五年	二
一六七六年—一七〇〇年	二・三三	一七〇一年—二五五年	二・七五
一七二六年—	三	一七五一年—七五五年	二・三三
一七七六年—	二		

是れに由つて觀ると、ゾンバルト<sup>(1)</sup> Sonbартが其の著「近代の資本主義」に於て『若し歐洲にして從來一の植民地をも所有しなかつたならば、歐洲に於ける資金は缺乏を告げて今日と雖も尙自然經濟の境遇に在つたであらう。』と論じたのも決して暴評でないことが知られる。植民地が歐洲の經濟界に及ぼした働きは單に此の點の

みを見ても實に偉大なるものであつたことは明瞭である。而して當時の如き未だ正當なる貿易事業が發達しなかつた時代に於て、歐洲諸國が如何なる方法に依つて植民地よりして莫大なる金銀を輸入したかと云ふと、(一)歐洲人が植民地に於て鑛山の採掘をなしたること、(二)植民者或は本國政府の吏員杯が植民地の土人よりして金銀を贈物として受取りたること、(三)本國が租税として植民地より金銀を徵收したること、(四)植民者が植民地に在る土人の有する金銀を掠奪したること等であつた。此等の方法の内第一の方法、即ち植民地に於ける鑛山の採掘は歐洲に對し金銀を供給したる最も主なる方法であつて、植民地に於て歐洲人のなした一種の企業の結果であるから、今此の種の方法に依りて歐洲に供給せられたる金銀の額等に就て簡単に述べやう。

(1) Sombart, W., *Ibid.* Bd. I, S. 359.

### III

嘗て伊太利が小亞細亞地方に於て植民地を建設したときには、金銀を採掘して之を母國に輸出したる例は餘りない様である。亞弗利加にては最初アラブ人が金銀の採掘に従事したことがあるが、其の後葡萄牙人出で、先づセネガル地方に移住し後東部亞弗利加に進入するや、盛んに貴金屬を採掘したものである。ソートベール Soetbeer の調査に依れば十五世紀の終より十七世紀の始めに至る間に、亞弗利加よりして歐洲に輸出したる金銀の總額は次の如くであると云ふ。

一四九三年—一五二〇年	二三四、三六〇、〇〇〇 <sup>麻克</sup>
一五二一年— 四四年	一六七、四〇〇、〇〇〇
一五四五年—一六〇〇年	三一二、四八〇、〇〇〇
一六〇一年—一七〇〇年	五五八、〇〇〇、〇〇〇

即ち約二百年間に金銀の輸出額は總計十二億七千二百二十四萬麻克の多きに上つたのである。

然しながら何んと云つても歐洲に多額の金銀を供給したるものは新大陸であつた。今二三の例を述べやう。

フンボルト Humboldt<sup>(1)</sup> の調査に依ると新西班牙に於ける金銀の一ケ年平均生産額は次の如くであつた。

一四九二年—一五〇〇年	二五〇、〇〇〇 <sup>ペンス</sup>
一五〇〇年—一五四五年	三、〇〇〇、〇〇〇
一五四五年—一六〇〇年	一一、〇〇〇、〇〇〇
一六〇〇年—一七〇〇年	一六、〇〇〇、〇〇〇
一七〇〇年—一七五〇年	二二、五〇〇、〇〇〇
一七五〇年—一八〇三年	三五、三〇〇、〇〇〇

即ち一四九二年より一八〇三年に至る約二百年の間に生産したる金銀の總額は無慮五十三億三千八百萬ペソ<sup>(2)</sup>であつた。

(1) Keller, A, Colonization, p. 209.

(2) Keller 前掲書には 1493—1803 の總生産額 5,706,700,000 ペソとあり。

尙メキシコに於ける銀の生産額は次の如くであつた。

	メキシコに於ける 一ヶ年平均生産額	世界に於ける 生産總額
一五二一年—	四四年	三、四〇〇 <small>キログラム</small>
一五四五年—	六〇年	一五、〇〇〇
一五六一年—	八〇年	五〇、二〇〇
一五八一年—一六〇〇年	二一年	八一、二〇〇
一六〇〇年—	二一年	四二二、九〇〇
		三一一、六〇〇
		二九九、五〇〇
		四一八、九〇〇
		四二二、九〇〇

以て當時世界に於ける銀の生産上メキシコが如何に重要な位地を占めて居つたかを知ることが出来る。

次にブラジルに於ける金の生産額を示せば次の通りである。

	一五〇〇—	二〇〇年	一五〇〇—	百万両
一七〇一年—	二〇〇年	一五〇〇		
一七二一年—	四〇〇年	四九〇		
一七四一年—	六〇〇年	八一六		

此等二三の事實よりしても近代の初め新大陸に於て生産したる金銀は頗る莫大なる額に上つたものであることが解る。勿論生産額の全部が悉く皆歐洲に輸出せられたとは言ひ得ざるも、其の大部分が輸出せられたことは決して推測するに難くない。其の上巽きにも述べたる如く、植民地に於て鑛山を採掘したる方法以外に植民者は先住民族が多年蓄積したる貴金屬を種々なる手段に依りて獲得したることを思ふときは、植民地は西歐

洲諸國に對して最も重要な金銀の供給地であつて、ゾンバルトの言の如く歐洲の經濟界をして自然經濟より貨幣經濟に進ましめた有力なる一要素であつたことを知ることが出来る。

而して當時は一般に政治的道德も未だ充分に發達しないし、社會的制裁力も頗る薄弱であり、交通通信機關も尙不完全の時代であつたからして母國と植民地との間の經濟的關係の如きも兎角片務的の傾向があつた。獨り植民地開發の爲めに母國のみが經濟上の利益を壟斷し、植民地は只母國の爲めに利用せられたに過ぎなかつたのである。或は寧ろ植民地は母國の爲めに悪用せられたものであると評する方が至當であるかも知れない。

然しながら各國の文化が發達し、國家の法律や社會的制度は次第に整備し、國際間の關係は益々密接となり政治的及び經濟的行動の如きも従前と異なりて次第に道義に依りて支配せらるゝ様になつてから、植民國が所轄の植民地を利用して經濟的利益を收むる爲めに採用した手段方法の如きも漸次改善し來つたのは當然である。従前の如く徒らに無辜の土人を虐待して植民地の資源を攪亂し己れ獨り利益を壟斷せんとするが如き行動は、獨り正義人道に反する許りでなく、植民地は勿論のこと遠き將來のことを慮るときは植民國の爲めにも不利益を醸すものである。此の道理を能く了解すると、植民國は從來の政策を改めて遂に自から進んで豊富なる自國の資本を植民地の事業に投し合理的方法に依りて之を經營し、己れを利し又植民地のものも共に利益を得せしめんとするに至つた。斯くしてこそ始めて母國と植民地とが共存共榮たるべき實を擧げることが出来る、一般人類の幸福を増進するを以て主要なる目的となすべき植民政策の目的を貫徹することが出来るのである。



されば吾人は一步進めて現時の植民地に於ける企業が母國の經濟に如何なる影響を及ぼしつゝあるかの研究に移ることとする。

## 四

現今植民界の狀勢を見るに、従前溫帶地方に存在したる植民地の多くは既に母國より獨立して一國家を形成した。而して未だ獨立國とならざるものも、殆んど獨立國と相等しき程度に政治的及び經濟的實力を有して居て、其の多くは英帝國の領土である。されば現今世界にある植民地の數は百三十五の多きを算ふるも、大部分は熱帶若くは亞熱帶圏内に存在して居るのである。溫帶地方に在る植民地には多數の植民者を移して天然の資源を開發することが出来るけれども、其の他の地方に在るものは風土氣候等の關係よりして母國民の永住をなすに適しない。然しながら此等植民地の自然の資源は、之を一般的に論ずれば溫帶地方に在るものゝ夫れに比べて遙かに優つて居る。此の資源を開發する爲めには、前記の如く母國よりして多數の植民者を送ることは困難であるけれども、幸に此等の植民地には文化の程度は低きも多數の先住民族が住して居り其の勞力を利用し得る途があるから、天然資源の開發をなすに必要な勞力には缺乏を感じることはない。けれども勞力と相並んで最も必要な資本に至りては植民地自から之を供給することが出来ないから之を他に仰がなければならぬ。茲に於て乎母國は移住者を送る代りに資本と智識とを植民地に移し、先住民族の勞力を利用して以て資源

の開発をなすに至つた。植民地を以て母國民の移住地としてよりは寧ろ母國の投資地として之を取扱ふに至つた。<sup>(1)</sup>「白き資本と有色の勞力」とは現今植民界に於ける一の趨勢をよく物語るものである。概論すれば、此等投資植民地に於ける文化の程度は母國に比すれば低く、法律制度の如きもまだ不完全であつて、植民者の生命財産の安全もまだ充分に保障せられず、其の上植民地に於ける事業は遠く隔たりたる母國よりして之を指揮監督しなければならぬから、植民地に於ける事業に投資することは、母國に於て之をなす場合より經濟上の危険はより大なるものがあるのである。然るにも拘はらず植民國の資本家が近時植民地の事業に投資するもの益々多きを加ふるに至つたのである。夫れは如何なる原因に基くものであらうか。吾人は植民地への投資の事實を述ぶる前に先づ此の原因に就きて考へて見たい。

(1) Lord Olivier, White Capital and Coloured Labour.

近時母國の資本家が進んで植民地に投資するに至つた原因は種々あるが、其の主なるものを述べれば、

一、十九世紀以來植民本國たる歐洲諸國等に於て各種の産業が前代未聞の發達をなした結果として資金は貯積し、自國內にては之を有利に投資し得べき餘地が漸次縮少し、事業經營上より生ずる利益の如き次第に減少し、遂には全然利益を擧げ得ざるに至つたものもあるが如き有様となつた。企業資本に對する收益の減退は資本家の耐へ難き處であるからして、彼等は多少の危険は犯しても國の内外を問はず、苟も利益のある事業なれば之を見逃さず進んで之れに投資するに至つたのである。

二、植民地に於ける企業は曩きに述べし如く本國に於ける事業よりはより多くの危険を伴ふものである。然るに植民地は母國と同一主權の下に統治せらるゝものであつて、制度文物の如きも之を外國に比すれば母國と共通のものが少なくなく、又一層共通なる制度が施行せられ得るものであつて、資本家も漸次母國に於ける投資と同様なる便宜と安全とを保障せられ得る望がある。

三、植民地に於て活動しつゝある官吏、就中重要な位置に在るものは多く母國民であるからして、母國の資本家は自づから彼等と親しき交際をなし、他の國にては容易に獲難き行政上の便宜等を得ることが出来る。

四、外國に於て有利なる事業を見出して之れに投資するとしても、其の國の政治の方針如何に依りては折角投資して實行しつゝある事業も、外部よりの壓迫等の爲めに、或は經營の規模を縮少したり、或は全然之を放棄しなければならぬ場合がある。ルロア・ポリュー Leroy-Beaulieu<sup>(1)</sup> に依れば斯る原因の爲めに佛蘭西が過去十ヶ年間に被りたる損失は収益に於て八千萬乃至一億フラン、資金に於て二十億フランに上つたと云ふ。

(1) Leroy-Beaulieu, P., La Colonisation chez les peuples modernes, 5me Edition, Tome Second, p. 517.

我が國の如きも現に斯る苦き經驗を砥めつゝあるのである。然るに自國の植民地に於ける事業に投資するときは、斯る危険に脅かさるゝこと全然無しと稱しても過言ではあるまい。ルロア・ポリューも『植民地は母國以外に於て絶對的公平の下に資本及び人を移住せしむる爲めに開かれたる唯一の場所である』と云つた。

(1) Leroy-Beaulieu, Idid., p. 518.

五、斯く論ずれば、資本家は如何にも營利一點張にて植民地に投資する様に考へらるゝが、事實は必ずしもそうではなく、収益の上より見れば投資をなす價值少なき植民地の事業にも、國家的觀念よりして經濟上の不利を忍びつゝ喜んで投資する場合がある。斯かる觀念は英國の資本家に特に認めらるゝ様である。例へば南阿會社の經營の如き多くの年は無配當であるにも拘はらず、英國の資本家は該會社の事業を以て國家的事業となし、國民として是非共之を援助して成功せしめなければならぬとの考へよりして喜んで資金の募集に應じ、而かも株の市價の如きも常に額面價格を超過する有様である。

斯くの如き種々なる原因よりして、近時母國の資本が廣く植民地の事業に投資せらるゝに至つたとして、實際投資の狀況は如何であるか、次に二三の實例を引證しやう。

## 五

植民地が母國の投資地として如何なる價值を有するかを知る爲めに、先づ五十有餘の植民地を有して居る英國を採つて研究する。

列國間の交通開かれて以來十八世紀頃に至りて交通通信機關等が次第に備はり、世界各地の事情が漸次明瞭となり、各國が經濟的に相共同して活動する様になるに伴つて、和蘭のアムステルダム市は遂に當時の世界金融市場の中心地として活動する様になつた。然るに其の後和蘭共和國はナポレオン一世に依りて顛覆せられ、

莫大なる償金を課せられたる上にアムステルダム銀行や和蘭東印度會社の失敗等が相續いて起りし爲め、遂にアムステルダムは世界金融市場の中心としての位地を倫敦に譲るの己むなきに至つた。是れ英國は當時多くの歐洲諸國が未だ農業時代に在りたる間に、早くも産業界に革命が起つて商工業の發展を促がし、漸次資金の貯積を齎らしたが爲めに外ならない。斯國の富に關する調査を見るに、一六六〇年には二億五千萬磅（ペッチー Petty）、一七〇三年には四億九千萬磅（デーヴナント Davenant）、一七七四年には十一億磅（ヤング Young）に過ぎなかつたが、一八〇〇年には十七億四千萬磅（ベック及イーデン Becke & Eden）、一八一二年には二十一億九千萬磅（カルクホーン Colquhoun）、一八三三年には二十七億五千萬磅（パブラー Pabrer）、一八四〇年には四十一億磅（ポーター Porter）と漸次増加した。國內に富が充實すれば充實する程、國內に於て有利的に之を利用し得る途は次第に減少して投資に對する収益の割合は低下した。例へば十九世紀の初め頃には、紡績業へ投資すれば一ヶ年一割五分乃至二割の利益を得たるものが、同業者の増加に伴つて競争は劇甚となり、遂に利益は一割に減じ、續いて五分となり、後には二三分と低下した。茲に於て乎資本家は更に方向を轉換して鐵道事業に手を着け、最初は二割乃至二割五分の利益を擧げ得たるも、鐵道が延長し併行線杯が布設せらるゝと一八六〇年頃には僅かに四五分となり、後には全然無配當のものすら生ずるに至つた。英國の生産業者は又進んで斯國生産物の販路を廣く海外に求めんと努めたるも、自國の産業を保護する目的で關稅政策に依り外國品の輸入を抑制せんとするものありて充分に其の目的を達することが出来なかつた。此の間の事情を洞察して

有力なる英國の資本家は國內に於ける生産業に投資して生産物を外國に輸出すると共に、資本を外國に投じて利益を收めんとするに至つた。最初は海外に於て信用の最も強固なる外國政府を相手としたものであるが、其の後海外の事情漸次明瞭となるに従ひ、外國資本家と或は相提携したり、或は單獨にて海外に於ける種々なる事業に投資した。北米合衆國・獨逸・露西亞等は最初英國資本に對する好個の投資地であつた。然るに其の後時勢の進運に伴つて、此等後進國や其の他の國に於ても英國と同様に生産業が勃興し、資本が充實し、最早外國よりして資金の供給を仰がなくても自から自國內に於ける資金の需要に應ずることが出來て、自國內に於ける英國の投資を買ひ戻すと共に、遂には進んで英國と世界の金融市場に於て競争をなし得るに至つた。是れ前世紀の半ば以降のことである。斯くして英國は従前の如く世界の投資市場を獨占することが出來なくなつたのであるから、從來採り來つた海外投資の方針を漸次改めて自國の植民地及び斯國と特殊の關係の下にある地方に特に注意を投ふに至つた。植民地に於ける鐵道の布設、鑛山の探掘、港灣の改築、製造業の計畫等は何れも皆英國投資の好材料となり、遂に英國の植民地は英國に對し重要な投資地となつたのである。

今二三の數字的資料を示して之を證明しやう。

先づ最初に近年英國が海外諸國に對して年々投資したる金額を調ぶるに、一九〇〇年より世界戦争前までの狀況はホブソン<sup>(1)</sup> Hobson に依れば左の通りである。

一九〇〇年	二六、〇六九 <sup>千磅</sup>	一九〇七年	七九、三三四 <sup>千磅</sup>
一九〇一年	二六、九七八	一九〇八年	一一七、八七一
一九〇二年	六二、二一四	一九〇九年	一五〇、四六八
一九〇三年	六〇、〇一三	一九一〇年	一七九、八三二
一九〇四年	六四、六一六	一九一一年	一四二、七四〇
一九〇五年	一一〇、六一七	一九一二年	一四四、五六〇
一九〇六年	七二、九九五	一九一三年	一四九、七三五

(1) Hobson, C. K., *The Export of Capital*, p. 214.

即ち今世紀の始めに於ては英國の海外投資額は一ケ年三千萬磅以内であつたが、其の後漸次増加し一九〇八年に至れば一億磅を超過し、一九一〇年の如き約一億八千萬磅に上り、世界戦争の勃發したる直前には一億五千萬磅であつた。斯く年々増加しつゝある海外投資額は年と共に其の總額を増加し、一九〇六年の現在額は三十一億五千萬磅であつた。其の内植民地への投資額は十六億二千六百萬磅で、外國への夫れは十五億二千四百萬磅であつた。既に今世紀の始めに於て植民地への投資が外國への投資を少額ではあるが超過するに至つたのである。

其の後<sup>(1)</sup>一九〇八年末に於ける海外投資は一九〇六年と餘り大差なく三十億五千萬磅であつて、内植民地へは十五億六千六百萬磅、外國へは十四億八千四百萬磅である。更に植民地への投資額を植民地別となすときは、

英領印度	四七〇	ケイプコロニー	九八
濠洲	三二一	ローデシア及東亞弗利加	五九
加奈陀	三〇五	ナタール	三〇
トランスヴァール及 オレンジコロニー	二二〇	其の他	六三

である。

(1) Webb, A., New Dictionary of Statistics, p. 81.

又一九一〇年の上半期間に英國が海外に投資した金額は總計約一億一千一百萬磅であつて、之を地方別となすときは、

英領植民地	五、二三五	四七・一六%
中米及南米諸國	三、六六四	三二・八四
歐洲諸國	一、二八八	一一・六〇
亞細亞	四四九	四・〇五
北米合衆國	二三〇	二・〇七
其の他	二五九	二・三二

であつた。

又ペーシユ Paish<sup>(1)</sup> に依れば一九一〇年現在の英國海外投資額は三十二億磅であつて、之を地方的に細別すれば次の通りである。

投資地としての植民地の價值



總額		百萬磅
亞米利加	一、七〇〇	五三
北美合衆國	六八八	—
加奈陀	三七二、五	—
アーゼンチン	二六九、八	—
ブラジル	九四、四	—
墨耳其	八七、三	—
亞細亞	五〇〇	一六
印度及セーロン	三六五、四	—
日本	五三、七	—
支那	二六、八	—
亞弗利加	四五五	一四
濠洲	三八七	一二
歐羅巴	一五〇	五

(1) Sombart, W., Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus, Bd. 1, S. 492.

是れに由りて見ると、海外投資額三十二億磅の内植民地に關するものは約十五億八千萬磅である。

世界戦争直前の海外投資額と最近八ヶ年間に於ける新投資額とを比較し、更に之を植民地と外國とに區分するときは次の通りである。

(1)

種 民 地	内		外 國	内		計
	政 府	其 の 他		政 府	其 の 他	
一九一三年	七二、二六	二五、七五	九二、六五	四、五一	二七、二九	一六三、九一
一九二一年	九〇、五八	七八、五三	二二、三三	一一、〇五	五、九〇	一三三、八〇
一九二二年	七四、九二	六五、六〇	五五、二三	九、三二	二一、三四	一三〇、一五
一九二三年	九二、七二	七四、一五	四四、七五	一八、五七	二六、四六	一三七、四七
一九二四年	七二、二八	五六、二二	五二、四四	一六、〇六	四三、〇三	一二四、七三
一九二五年	六〇、九二	三三、三二	一六、二八	二七、六〇	一、三五	七七、二〇

(百萬磅)

(1) Wirtschaft und Statistik, 6. Jahrgang, No. 11, S. 254 & v) 改算。

(百萬磅)

(1)

種 民 地	内	
	政 府	其 の 他
一九一三年	七六、一	二六、三
一九二七年	九九、八	五五、七
一九二八年	六三、二	四〇、二
一九二九年	六一、〇	二六、四

投資地としての植民地の價值

一九

計	内		外
	政 府	其 の 他	
一六〇、五	二六、二	八四、四	四八、五
一四八、三	一一、八	三六、六	四三、三
一〇五、五	一五、九	二六、四	二六、二
八七、三	三、六	三三、六	三、六

(1) 東洋經濟新報第1384號より改算。

尙<sup>(1)</sup>一九一三年と一九二八年とに於ける英國資本の海外に於ける投資總額を次に示さう。一九一三年の事實はサー・デョオージ・ペーシユ Sir George Paish の調査であつて、一九二八年の夫れはエコノミスト及びキンダースレー Kinderley の調査である。

(1) Economist, November 15, 1930, p. 896.

	一九一三年末	一九二八年
加奈陀及ニューファウンランド	五一一 <small>百万磅</small>	五一一 <small>百万磅</small>
濠洲及新西蘭	四一六	五七二
印度及セーロン	三七九	三五四 <sup>a</sup>
南亞弗利加	三七〇	四八〇 <sup>b</sup>
其の他	一〇〇	
計	一、七八〇	一、九一八

北米合衆國	七五五	七七
アーゼンチン	三二〇	
其の他ラテン亞米利加	四三七	七六二
歐羅巴 <small>(露西亞を含み 土耳其を除く)</small>	一七五	三八二
其の他	二四八	二五二
計	一、九三五	一、四七三
總計	三、七一五	三、三九一

備考 a セーロン政府及團體を除く。

b 埃及政府及團體を含む。

此等三四の資料に依るときは世界戦争直前に於ける英國の海外投資額は三十七億磅を超過し、而かも約其の半ばは植民地への投資であつた。世界戦争中に英國は軍人動員令及び穀物動員令と相並んで債券動員令を發し、海外諸國に投資したる資金を回収して以て軍事費其の他の經費の支辨に當てたことは吾人の記憶に尙新なるものである。英國は比の非常政策に依りて獨り自國の軍事費を支辨し得たる許りでなく、聯合國に對しても巨額なる資金の貸附をなして等しく軍事費を支辨せしめ、遂に強敵をして我が軍門に降るの己むを得ざるに至らしめたのである。是れは非常時に於ける例外の出來事に過ぎないが又以て英國の植民地が斯國の資本に對し如何に重要な投資場であつて有用なる職務を果しつゝあるかを知ることが出来る。之と相類似したる他の一例は普佛戦争後佛蘭西が多大の賠償金を課せられたにも拘はらず、期限内に能く之を拂ひ得たのは斯國が植

民地其の他に貸付てあつた資金を回収したが爲めであつたと言はれて居る。

戦後英國の財界は戦争中被りたる創痍未だ癒へざる爲め、海外に向つて投資し得る餘裕は戦前の如くでなくして、曩きに示したる諸表に依りても明かである如く、一九二一年以降年々の海外投資は多少其の額を減少した。然しながら投資額の減少したのは主として外國に對するものであつて、植民地への投資は餘り減少しないで、植民地は今尙依然として英國資本に對する好市場である。

又一九二八年現在の海外投資額三十三億九千萬鎊を以て戦前の夫れに比すれば三億二千萬鎊を減少した。而して之を外國と植民地とに分つて觀察すれば、外國への投資は四億六千餘萬鎊を減少したが、植民地への投資は却つて一億四千萬鎊を増加した。英國の如く他の強國に先んじて國力は充實し、世界何れの處に於ても有利なる事業があれば、能く夫れに投資し得る特殊の便宜を有する國ですら、現今斯國植民地は外國に比してより良好なる投資地であるのである。若し夫れ今日突然他の國が英國に代つて同一の植民地を有し、同一の經濟状態の下に在りと假定すれば、英國の現状よりも更に一層多く植民地への投資が増加するであらうとは決して想像するに難くない。又以て投資地としての植民地の價値の如何に大なるものであるかを知るに足るであらう。

## 六

外國の實例は先づ英國丈けとして進んで我が國の植民地が母國の投資地として現在如何なる立場にあるかを

研究しやう。然しながら此の研究をなすに當り我國には遺憾ながら適切なる調査資料を欠ぐからして官廳統計等を基として植民地に於ける投資の趨勢の一般を窺ふこととする。

先づ我が國の最大植民地たる朝鮮より始める。

朝鮮に於ける本邦人の企業の状況を見るに、個人企業・組合企業・會社企業等種々なる形式に依て行はれつゝあるが、其の内最も重要なものは會社企業である。我國が朝鮮を併合するや、朝鮮に於ける企業の安全を計る爲めに、明治四十三年十二月制令第十三號を以て朝鮮會社令を又府令第六十六號を以て同令施行細則を公布し、翌明治四十四年一月より之を施行した。其の後朝鮮人の經濟的實力も著しく發展し、一般に智識の程度も向上して會社企業に關する理解も亦進歩し、其の上朝鮮に於ける母國人の企業も益々發展するに至つたので大正九年四月會社令を廢止したのである。朝鮮に於ける産業の發展に伴ひ會社企業は益々其の數を増し益々其の規模を擴大した。

今先づ朝鮮に本店を有する會社企業の發展及び之れに對する本邦人の關係に就いて調べて見ると左表の通りである。

年次	總數		內地人設立		內鮮人設立		內外人設立	
	會社數	拂込資本額	會社數	拂込資本額	會社數	拂込資本額	會社數	拂込資本額
明治四十四年	一五三	一五,九〇九,八二五	一〇九	五,〇六三,〇二〇	一六	八,一〇四,四五〇	一	
大正元年	一七一	二九,二七六,六五〇	一二七	六,〇四七,八〇〇	一九	一六,七八〇,四七〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正二年	一九四	三三,七四六,〇一一	一三二	七,〇四六,八〇〇	二二	一九,七九二,八六六	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正三年	二一一	三八,五一四,三八一	一四二	八,三七九,〇七三	二九	二三,〇〇一,〇四五	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正四年	二二六	三九,二四八,六八六	一四七	八,八〇六,六四〇	二九	二三,三七五,一五〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正五年	二二二	四三,九二〇,一五二	一四七	二二,一〇五,〇四四	二八	一四,〇三九,一〇〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正六年	二三八	四七,七七七,七三四	一七七	三八,〇一九,四九二	一三	一,八八一,〇〇〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正七年	二六六	六九,八六九,五九五	二〇八	五四,六六二,四九〇	一八	五,八九一,一九〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正八年	三六六	一〇七,七六一,五七七	二八〇	八三,三七五,九六二	二二	一〇,九八二,〇〇〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正九年	五四四	一八二,八三〇,四一〇	四一四	一五一,八九三,三〇一	二九	九,五八三,三五〇	二	二,一五〇,〇〇〇
大正十年	七〇五	二〇四,八九一,〇九二	五四一	一四九,〇九六,二〇八	三九	二七,六九六,二五〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正十一年	七五九	二二八,九四九,五五七	五九八	二〇八,四八四,二七七	五一	八一,二七八,〇七〇	一	二,〇〇〇,〇〇〇
大正十二年	九二〇	二七九,三〇〇,二五一	七二二	一七四,三八九,九七八	六七	七九,二三三,七五〇	二	一〇七,八六六
大正十三年	一,〇〇一	二五八,五八四,一四〇	八二二	二二二,五三二,一七〇	五六	一二,九三七,五〇〇	一	一〇〇,〇〇〇
大正十四年	一,一八九	二二二,四七七,七四五	九三八	一五六,六五一,八五一	八六	四〇,二三一,七八〇	一	
昭和元年	一,二七六	二二六,三六一,四八九	九七四	一四八,八四九,一四〇	一一三	三六,八一九,三九〇	三	六,〇〇〇,〇〇〇

昭 和 二 年	昭 和 三 年	昭 和 四 年
一、三五八	一、五四七	一、七六八
二、三九、〇三九、九〇九	二、四八、一〇八、一〇七	三、一〇、六二〇、七八七
一、〇三五	一、一三四	一、二三七
一、七五、三五七、〇〇〇	一、七六、〇〇七、九六七	一、九三、七三六、六六九
一〇八	一二六	一六五
三六、七八一、九八五	四七、九三三、四六五	九五、七八五、一〇六

備考 ×内鮮外合同。

明治四十四年即ち日韓併合の翌年には朝鮮に本店を有する會社の總數は百五十二にして、拂込資本額も僅に一千五百九十萬九千八百二十五圓に過ぎなかつたが、昭和四年には其の數一千七百六十八、拂込資本額は實に三億一千六十二萬七百八十七圓に増加した。即ち前者は約十二倍し後者は二十倍となつたのである。日韓併合直後の會社企業の内、本邦人のみの設立に係るものは百九にして、拂込資本額は五百萬圓に過ぎなかつた。其の外本邦人が朝鮮人と合同して設立したる會社數は十六、拂込資本金八百十萬圓あつたが、當時本邦人の朝鮮に於ける投資はまだ極めて微々たるもので殆んど論ずるに足らなかつたのである。然るに其の後は年に依り多少の消長はありたるも、概して言へば常に進展の傾向を示し、遂に昭和四年に至り本邦人のみの設立になる會社は千二百三十七となり、拂込資本金額も一億九千三百七十餘萬圓に上つた。即ち前者は十二倍し後者は實に三十倍の増加であつた。其の外朝鮮人と共同しての會社企業は其の數百六十五にして、拂込資本金も約九千五百八十萬圓に上つた。所謂内鮮人設立の會社企業に於ける拂込資本額の内、本邦人の出資に成るものが果して幾何あるか明瞭に知ることが出来ないからして會社企業として朝鮮に於ける本邦人の投資總額も明瞭でない。



れども、少なくとも二億五千萬圓を下らずと推定しても決して多きに失する推定ではあるまい。之れを以て明治四十四年頃に於ける會社企業として本邦人の投資額約一千萬圓と比較するときは十八年間に實に二十五倍の増加である。

此の外朝鮮に支店を有する内地會社がある。其の數は明治四十三年には僅に二十五であつたが昭和四年には九十八となり、拂込資本金も六千五百二十萬圓から八億八千九百萬圓となつた。此等拂込資本金の内幾何が朝鮮の事業に投資せられつゝあるか全然之を推測することは出来ないけれども、會社數が四倍となりたる點より考へて見ても其の額の少なくないことは想像される。

次に朝鮮に於ける工場に就て調べて見やう。

明治四十三年即ち韓國併合の年には、職工五人以上を使用する工場數は僅に百五十一にして其の資本金も七百九十八萬圓に過ぎなかつたが、最近には次の如く増加した。

	工場數	資本金	生産品價額
明治四十三年	一五一	七九八 <small>万円</small>	?
大正十四年	四、二三八	二六、五八五	三三七、二四九
昭和元年	四、二九三	三一、九一八	三六五、八四九
昭和二年	四、九一四	五四、二六五	三六九、六〇四
昭和三年	五、三四二	五四、九一二	三九二、五三四

備考 職工五人以上を使用するもの又は職工五人以下なるも原動力を使用するもの若くは一ケ年の生産價額五千圓以上のもののみ。

即ち此の期間中に工場數約三十五倍となり、資本金は約七十倍となつた。實に目醒しき劇増振りである。此等工場經營と本邦人の關係に就て昭和三年の事實は明かではないが、大正十四年、昭和元年及び昭和二年には工場資本金中本邦人の投資せるものが二億三千二百八十七萬圓と二億七千三十四萬圓及び四億九千五百五十二萬圓である。即ち資本總額に對し八七・六%、八四・七%及び九〇・四%に相當する。尙此等工場よりの生産品價額の内本邦人工場より生産したるものは、大正十四年には六七・二八%、昭和元年には六二・六七%、昭和二年には六三・二四%であつた。私設工場の外朝鮮には官公署の經營する工場がある。若し此の種の工場の生産品價額を以て本邦人工場の夫れに加ふるときは、大正十四年には工場生産品總價額の九三・一三%、昭和元年には八九・五三%が本邦人の投資に依り生産せられたものであることを知る。

以上述べたる二三の實例より考へて見ても、現今朝鮮に於ける企業界は主として本邦人の手に成りつゝありと稱しても敢て過言ではあるまい。是れ畢竟朝鮮が我が領土に併合せられたる結果に外ならないのである。

尙朝鮮には民間企業の外に朝鮮總督府の經營する種々なる企業がある。此等の官業に對し國家は幾何の資金を投入したるものであるか之を知るに適切なる資料は無いけれど、其の收入の多額なることよりして投資額も亦莫大なりしことを推測することが出来る。即ち次表の示す如く昭和元年度より昭和五年度に至る五ケ年間に

官業及官有財産經常收入は一億圓乃至一億四千五百萬圓であつて、總歲入に對し四九%乃至六〇%、經常歲入に對し六六%乃至七二%の多きを占めて居る。

年次	總歲入	經常歲入	官業及官有財産 經常歲入	官業及官有財産經常歲入の	
				總歲入に對する割合	經常歲入に對する割合
昭和元年度	二二一、七〇八、八九三 <sub>円</sub>	一五九、六四六、五一九 <sub>円</sub>	一〇三、九六七、九七八 <sub>円</sub>	四九・〇三%	六五・六九%
昭和二年度	二三四、二四三、二一九	一七二、九九五、一五五	一一六、四〇六、〇二八	四九・六九	六七・二九
昭和三年度	二三八、一五二、二九四	一七六、七〇八、五九八	一一八、五八七、四六六	四九・七九	六七・二二
昭和四年度	二四六、八五二、八四二	一九五、九七五、〇〇三	一三六、七九三、一三一	五五・四一	六九・八〇
昭和五年度	二三九、七二九、七八三	二〇二、〇五七、五四〇	一四四、七一〇、〇〇六	六〇・三六	七一・六三

備考 昭和元年度より昭和三年度までは決算、昭和四年度及び五年度は豫算。

(I) 朝鮮總督府統計書。

七

次に臺灣に於ける本邦人の投資の状況を調べて見やう。臺灣に關しては朝鮮に關する程の資料もない。依つて先づ私的資本の臺灣に於ける投資の一端を伺ふために臺灣に本店を有する株式會社の拂込資本額を調べた。次表に示す如く大正九年より昭和四年に至る最近十ヶ年間の調べにては拂込資本額は三億圓乃至三億四千餘萬

圓である。此の外に株式組織以外の會社企業があり個人の企業もある。此等企業資金の内、本邦人の投資に關するものが何程あるか全然これを知る事が出来ない。今假りに臺灣に本店を有する株式會社の内、最も重要な製糖業及び銀行業に關するものみの拂込資本を見るに、次表の如く二億圓内外である。極めて大ざつばな推定ではあるが、假りに此の金額を以て本邦人が臺灣に於て株式會社組織の企業の下に投資しつつある資金であると見做すときは、實際上の投資額に比べて決して多きに失する推定額ではあるまいと思ふ。今假りに本邦人の投資を以て二億圓とし、之に對する利益の割合を一ケ年一割となすときは、一ケ年二千萬圓の利益が臺灣に於ける株式會社組織に依る企業よりして本邦の投資家の手に期する理である。是れ臺灣が我が植民地となりたる爲に生ずる一種の經濟的價值である。

年次	拂込資本總額	製糖業及銀行業に關する拂込資本額	年次	拂込資本總額	製糖業及銀行業に關する拂込資本額
大正九年	三〇九、五三〇、六八〇 <small>円</small>	二二六、三四九 <small>千円</small>	大正十四年	三二七、九五〇、一一〇 <small>円</small>	二〇二、九九〇 <small>千円</small>
大正十年	三二八、一五五、四四〇	二二七、〇六三	昭和元年	三二一、九八六、三八一	二二二、五九一
大正十一年	三四〇、八七九、三三四	二二五、八〇三	昭和二年	三二五、八五六、二三九	一七六、三三三
大正十二年	三四一、八七四、七二三	二二〇、六三三	昭和三年	二九四、五四八、二五二	一六四、〇八八
大正十三年	三四五、七六四、九二三	二二三、六八三	昭和四年	三二三、〇八七、五三七	?

臺灣にも亦朝鮮と等しく臺灣總督府が直接經營する事業が澤山ある。大正十二年度より昭和四年度に至る七

ケ年間に於て此等官業より生ずる収入が總督府の總歳入及び經常歳入に對する割合等を見るに左表の通りである。

年次	總歳入	經常歳入	官業經常收入	總歳入に對する官業收入の割合	經常歳入に對する官業收入の割合
大正十二年度	一一一、〇九七、五六一 <sup>円</sup>	八六、一二四、三三八 <sup>円</sup>	六四、一六〇、一〇七 <sup>円</sup>	五七・七五%	七四・五〇%
大正十三年度	一二三、六一四、七九七	八五、二五五、八一八	六三、二〇八、三〇六	五五・六三	七四・一四
大正十四年度	一二九、五五九、八七六	九二、〇五二、三三三	六八、五三一、五六七	五三・一四	六九・〇二
昭和元年度	一三一、七七八、〇〇四	九六、五八八、三五八	六九、四四八、九三五	五二・七〇	七一・九〇
昭和二年度	一三八、六〇六、八三〇	九三、二二五、七六三	六八、八〇五、〇八一	六四・〇〇	七七・一六
昭和三年度	一四七、五三三、八一	一〇四、三七七、五二六	七七、四九九、四六六	五二・五三	七四・二五
昭和四年度	一一八、七二〇、二七九	一〇一、二三五、五八〇	七七、五七二、六六三	六五・三四	七六・六三

備考 大正十二年度より昭和元年度までは決算、昭和二年度及三年度は現計、昭和四年度は豫算である。

前表によれば七ケ年間に於ける官業經常收入は、六千三百萬圓乃至七千八百萬圓であつて其の額決して少いとは云へない。而して此の種の収入が總督府の經常歳入に對する割合を見るに、六九%乃至七七%であつて經常歳入の大部分を占め、總歳入に對しても五三%乃至六五%に相當し、臺灣總督府の歳入の最も重要な部分は官業であつて、臺灣の財政は朝鮮に於ける場合と等しく官業收入に基を置いて居るのである。斯かる重要な

る官業に對し從來我が母國が幾何の資金を投入したものであるか、正確なる資料を手にしないから之を統計的に立證することは出來ないけれども、蓋し其の額の莫大なるものであることは推測するに決して難くないのである。

斯くの如く我が國の植民地たる朝鮮及び臺灣の二例を採りて研究しても、植民地が母國の投資地として極めて大切なる役割を演じつつあることを證明する。朝鮮・臺灣の如き既に或る程度まで文化の發展したる先住民族の多數住する處に於てすら然りである。若し夫れ樺太の如き全然我が民族の手に依りて開發せられつつある植民地にては、之が開發に必要な資金は總て皆母國の資本に依りつつあることは云ふまでもない。

## 八

最後に母國の資本を植民地の事業に投入することに依り母國の經濟界は如何なる影響を被むるかに就きて考へて見たい。此の問題は種々なる前提の下に考察する必要があるからして以下數多の項に分つて之を述ぶることとする。

一、母國の資本が植民地の事業に投入せらるゝ場合には其の額の多少を問はず、投入したる額だけば母國の金融市場よりして引き出さるゝものであるからして、母國に於ける事業に投資し得べき資金は其の額だけ減少することとなる。植民地への投資額にして餘り多額に上らない限り之が爲めに直接母國の經濟界に及ぼす影響

も輕微なるものであらう。然しながら若し其の投資にして相當多額に上るときは、母國に於ける資金の需要を從來と同一なりとしても資金の供給が減少するのであるから、資金の需給關係よりして融通資金に對する利率の騰貴を促がすことゝなり、少なくとも利率の低落するのを抑ゆることゝなるのである。若し其の場合に於て利率が餘りに高くなれば母國に於ける企業の發展の妨げとなる。而して若し母國に於ける利率が騰貴して植民地に於けるものと餘り大差なきに至ると、母國の資本家は母國に於ける企業より一般に危険の多い植民地へ投資するよりは寧ろ母國內の事業に投資するからして、植民地への投資は自然と減少することゝなるであらう。

二、植民地へ投資したる結果として母國に於ける資金の利率が騰貴するときは、母國民は其の利益に預からんとして自ら從來よりも更に一層多くの貯蓄をなし資金を増加せしむるからして、より多くの報酬を受くるものが増加する。然しながら資金が増加して資金の供給が需要を超過する様になれば利率は自から再び低落する。

三、植民地への投資は一般に母國內に於ける投資よりはより多くの報酬を與ふるものであるからして、母國民は之が爲に収入を増加し、生活を容易にし、且之を向上せしめ得るのである。隨つて母國生産物に對する需要を喚起するに至る。需要増加すれば或は新規に事業を企てたり、或は從來の事業を擴張したりして母國內に於ける事業の發展を見ることゝなる。

四、植民地へ投入したる資金の利用方法如何に依り母國に及ぼす影響が異なるものである。外國への投資は往々にして軍備の擴張や戦争の如き不生産的事業に用ひらるゝことあるも、植民地への投資は主として生産事

業を起したり若しくは文化的事業を遂行するが爲である。母國の資本を利用して事業を經營する場合には、母國の生産物に對する需要を増加して新たな市場の建設ともなる。ルロア・ポリューが『より、多く佛蘭西の資本を受取る國はより、多く佛蘭西の生産物を消費す。』と言ひたるも此の間の事情を能く説き明かしたるものである。何となれば事業經營に必要な機械、其の他の材料の如き未だ植民地に於て充分に之を獲ることが出來ず他よりの供給に俟たなければならぬ場合には、餘程他に特殊なる事情の存在せざる限りは、植民地の企業者は之を外國に仰ぐよりは寧ろ之を母國に需むるは自然の現象であつて、爲めに母國に於ける事業の隆盛を促すこととなるのである。是れ英國が植民地に於ける鐵道の敷設や、鑛山の採掘等種々なる事業に對し、或は政府に或は民間の企業會社に必要な資金を供給するとき、鐵道材料等の輸出が之に伴つて増加しつゝある所以である。ホブソンの資本輸出論よりして左の四表を藉り來りて之を實證する。此等の調査は世界戦争前の事實であるがゾンバルトも亦其の著書に之を引用せることから考へても極めて價值ある資料である。

(1) Leroy-Beaulieu, Ibid. p. 514.

(2) Sombart, W., Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus, I. Bd. S. 497.



年次	印度鐵道會社の倫敦に於ける發行債券		鐵道敷設哩數		鐵道會社の鐵道材料輸入	
	年次	磅	哩	英國より	英國及其の他より	
一九〇一年—二年	三〇〇,〇〇〇	二二五	九三八,七二一	一,〇二八,三八六		
一九〇二年—三年	三,〇三三,八〇〇	二〇八	一,〇四八,三八九	一,〇七四,四八一		
一九〇三年—四年	七五〇,〇〇〇	二〇八	八二二,七三三	九三四,六四三		
一九〇四年—五年	一,七九〇,〇〇〇	一六六	八三八,〇〇一	九三九,七七二		
一九〇五年—六年	二,一一三,〇〇〇	二二三	九八一,二二三	一,〇八一,七四五		
一九〇六年—七年	一〇〇,〇〇〇	二六一	二,六一一,七五二	二,七七二,二六〇		
一九〇七年—八年	二,二〇〇,〇〇〇	二七六	四,六五六,五九七	四,八〇〇,五五〇		
一九〇八年—九年	六,八九四,二〇〇	一九三	四,七四五,七〇九	四,九四六,六〇〇		
一九〇九年—一〇年	三,一八三,〇〇〇	二六五	三,二五一,四七三	三,六二七,〇六四		
一九一〇年—一一年	三,一〇〇,〇〇〇	四三六	二,五二八,九八四	二,八三〇,二二一		
一九一一年—一二年	八〇〇,〇〇〇	三八三	二,五八四,四二三	二,九五七,九七〇		

(1) Hobson, Ibid. p. 10.

年次	英國に於ける濠洲公債發行額		鐵道材料輸入額	
	年次	磅	英國より	英國及び其の他より
一九〇三年	七二〇,〇〇〇	五二〇	四四二,七五五	四九四,五八八

(2)

(2) Hobson, Ibid. p. 11.

年次	倫敦市場に於ける南阿政府の發行公債	國有鐵道建設哩數	英國鐵道材料より	英國及其の他より
一九〇四年	—	一〇三	一二七、三一七	一八四、〇三六
一九〇五年	三、三四一、〇〇〇	二五一	一一〇、六二四	二〇六、〇九一
一九〇六年	一、九九〇、〇〇〇	一六一	一三三、五三三	三四〇、四三五
一九〇七年	九七〇、〇〇〇	三〇三	五六二、六一〇	六二八、九三二
一九〇八年	二、四七〇、〇〇〇	四六八	五三〇、六七八	七九二、九二八
一九〇九年	九、三二一、九〇〇	四一五	四三六、八七二	八〇三、一六〇
一九一〇年	四、七五九、八〇〇	三九四	三九九、五四七	八二〇、六七七
一九一一年	一、九五〇、〇〇〇	六一二	四九九、六二九	一、〇七九、九二八

(3)

年次	倫敦市場に於ける南阿政府の發行公債	國有鐵道建設哩數	英國鐵道材料より	英國及其の他より
一九〇六年	—	四八七	一五〇、六四五	一八五、二九二
一九〇七年	四、八三八、四〇〇	四九七	一四〇、八三一	二二一、二二二
一九〇八年	二、九三一、五〇〇	三五二	五六、七九一	一〇二、一一三
一九〇九年	—	七九	八二、九六一	一七三、五二六
一九一〇年	—	一四九	三六、五九一	一八六、一四三
一九一一年	—	五〇六	四一、九二〇	一七一、六七四

投資地としての植民地の價值

(3) Hobson, Ibid. p. 12.

年次	倫敦市場に於ける 南阿鑛業社債發行額	英國及 其の他より	
		英國	探鑛機械の輸入
一九〇六年	一,四四六,四〇〇 <sup>磅</sup>	四六七,四六五 <sup>磅</sup>	七二二,四九五 <sup>磅</sup>
一九〇七年	二四八,八〇〇	五九八,八二三	八〇二,二六三
一九〇八年	二八二,八三〇	五三三,四六五	七四〇,九九四
一九〇九年	四,三四〇,七〇〇	七〇六,〇一〇	一,〇〇一,七一七
一九一〇年	二,五九五,七〇〇	九四五,九五三	一,二七九,四〇三
一九一一年	三,八八三,〇〇〇	六五九,五六二	九四七,二八三

(4) Hobson, Ibid. p. 12.

此等數表によりて見ると植民地の事業に母國の資本を投入するときは、之と相關聯して自から母國生産物に對する需要を喚起することは明かである。加ふるに海外投資よりして母國民はより多くの收益を得て彼等の生活は安定し向上するからして、自國內の生産業の發展を促すものであることは前項に述べた通りである。斯る事情が集まり集まつて植民地の事業へ投入したる資本が其の以前母國に於て利用せられた時よりもより有利に運轉せらるる許りでなく、母國內に残つて居る資本も亦植民地投資の行はるゝ結果としてより有利に利用せらるるに至るものである。<sup>(1)</sup> ジェー・エス・ミルが『資本の輸出は本國に残れる資本の利用區域を擴大する爲めに

極めて有効なる働きをなすものである。或る程度まではより多くの資本を國外に投資することに依り、多くの資本を國內に保持し得ることが出來ると確言し得る。』と言ひしは確かに一の眞理である。

(1) Mill, J. S., Principles of Political Economy, Bk. IV, chapter IV, p. 8.

五、海外に資本を投入して事業を企つるときは勞力の需要を増加し、賃銀の騰貴を促がし、他より移民を招徠する必要に迫まらるゝことがある。即ち資本の輸出は移民の移住を伴ふのである。其の場合に、若し獨立國若くは他の國に屬する植民地に投資しても、投資國よりして移民を招徠するとは限らない。否な寧ろ投資國以外よりして移民を招徠する場合は決して少なくないのである。例へばブラジル、アーゼンチン等の如き南米諸國は英佛よりして多額の資本を仰ぎ、其の結果として種々なる事業は勃興し勞力の需要を喚起したものであるが、其の需要に應じたるものは英佛の如き投資國ではなくして、投資に關係の少ない伊太利・西班牙・葡萄牙及び我が日本等である。然るに若し自國の植民地に投資したる結果として勞力の必要を感じる場合には、母國よりの移民の増加となり、資金の招徠は母國よりの移民の招徠を伴ふこととなる。斯くして母國と植民地との關係は有形的に又無形的に益々親密となるのである。

六、母國と植民地とが地理上其他自然の狀況の御互に異なりたる處にありて、母國に於ける事業とは異なりたる種類のもが母國の投資によりて植民地に於て企業せられ發達するときには、母國は低廉なる食糧や製造原料の供給を受けて國民の生活は安定し生産事業も亦之れが爲めに利益を受くることはありても不利益を被

むる様なことはない。けれども若し母國と植民地とに於て同一種類の事業が企てられるときは、植民地は一般に母國よりも自然の資源に富むものであるから、時としては母國の産業に對して強敵となり、爲めに母國に於ける事業は悪影響を被むりて遂には衰退するか或は少なくとも事業の發展を阻止せらるゝ場合が無きにしもあらずである。斯る場合に植民地に於ける事業の發展は母國に不利益を齎らすものであるとして、母國の資本を之に投ずることを差し控めるとしたならば其の結果は果して如何になるであらうか。元來資本は他の生産要素に比すればより多く國際的性質を有して居るからして、若し植民地に於て有利なる事業が眼前に横たはつて居るにも拘はらず母國の資本家が自國に不利なりとして之を顧りみざるときは、植民地の企業家は必ずや外資に據りて其の事業を遂行せんと企つるであらう。然るときは母國の資本家は當然擧げ得ることの出來た利益を得ることは出來ないし、而かも植民地に於て有利なる事業は企てられて、爲めに母國の事業が脅威を感じる結果に至りては自國の資本を投ずる場合と餘り大差が無いこととなる。されば植民地に於ける生産事業が母國に於けるものよりより有利であるとするならば、是れ前者に於ける生産條件がより良好であるためであるからして、假とひ母國の事業を多少犠牲に供することありとするも寧ろ進んで母國の資本家をして斯る事業に投資せしめて之を發達せしむることが必要となるのである。然しながら斯る場合に於て特に考慮しなければならぬ點は、母國の投資に依りて起したる事業の爲に母國の被むる犠牲の程度は如何であるか、植民地に於ける生産物が母國民の生活に對する必要の程度はどうであるか、又植民地は母國の近傍に所在して母國と殆んど同様に之

を取扱ひ得るや否や等の問題である。

七、植民地への投資よりして生ずる利益の分配如何は又母國に異りたる影響を及ぼすものである。若し母國に於ける少數の資本家が主として植民地の事業に投資するときは、依つて生ずる利益を直接受くるものも亦少數の資本家である。彼等は得たる利益を更に運轉して生産事業に投資するであらう。然しながら彼等の多くは既に多額の資産を有するものであるから、動ともすれば植民地に於ける事業より生ずる利益を以て不生産的に使用することがある。又奢侈的慾望を満足する爲めに之を浪費する場合が少なくない。然るときは母國に於て奢侈的需用品を生産するものは之が爲めに利益を得るであらうが、其の他の企業家は利用し得べき資金が利用せられざるが爲めに利益を受ることが出来ない。若し之れに反して多數の母國民が植民地の事業に投資するときは、依つて生ずる利益も亦多數のものゝ間に分配せられて多數の母國民の生活の安定を來すことゝなり得るのである。現今の二大植民國たる英佛兩國は實に此の二種の適例である。

八、海外投資は投資國をして對外貿易上の決算を容易に且つ有利的に行はしむることがある。外國貿易の關係に於て輸入超過となりたる場合にも、所謂「見へざる輸入」あれば能く貨物の入超過を決濟し國民經濟をして健全なる發達をなさしむる。是れ世界戰爭前英獨の如き強大國が明かに示した實例である。此等兩國に於ては貨物の輸入は常に輸出を超過して居つて普通の場合には入超過は硬貨を以て決濟しなければならぬのであるが他方金銀の輸出入も亦、時には多少の例外はあつたが、殆んど常に輸入超過であつたのである。今英國の

實例を借りて之を説明する。

一九〇五年より一九一四年即ち世界戦争の勃發したる年までの過去十ヶ年間に於ける英國の海外貿易額を示せば次の通りである。

年次	輸入額	輸出額	輸入超過額
一九〇五年	五六五、〇一九、九一七 <small>磅</small>	四〇七、五九六、五二七 <small>磅</small>	一五七、四二三、三九〇 <small>磅</small>
一九〇六年	六〇七、八八八、五〇〇	四六〇、六七七、八一八	一四七、二一〇、六八二
一九〇七年	六四五、八〇七、九四二	五一七、九七七、一六七	一三六、八三〇、七七五
一九〇八年	五九二、九五三、四八七	四五六、七二七、五二一	一三五、二二五、九六六
一九〇九年	六二四、七〇四、九五七	四六九、五二五、一六六	一五五、一七九、七九一
一九一〇年	六七八、四四〇、一七三	五三四、三六五、九一五	一四四、〇七四、二五八
一九一一年	六八〇、一五七、五二七	五五六、八七八、四三二	一一三、二七九、〇九五
一九一二年	七四四、六四〇、六三一	五九八、九六一、一三〇	一四五、六七九、五〇一
一九一三年	七六八、七三四、七三九	六三四、八二〇、三二六	一三三、九一四、四一三
一九一四年	六九七、四三三、六四九	五二五、七三〇、三二一	一七二、七〇三、三二八

即ち此の十ヶ年間は常に輸入超過であつて之を一ヶ年に平均するときは

輸 入 額	六六〇、五七八、〇五二磅
輸 出 額	五一六、三二五、〇三一磅
輸入超過額	一四四、二五三、〇二一磅

である。斯くの如く外國貿易が輸入超過であつたことは獨り世界戦争前の十ヶ年間にのみ限られたる特殊の現象ではなくして、其の以前に遡りて見ても別に何等變る處がない。是れは寧ろ斯國外國貿易の常態であると稱しても可なりである。

外國貿易上に現はれたる入超過は普通の場合であれば硬貨を以て之を決済しなければならぬのであるから金銀の輸出を必要とする。其の上曩にも述べし如く英國は年々多額の海外投資を爲したから、更に一層輸出すべき金銀の額を増加すべき理である。然るにも拘はらず他方金銀の輸出入の狀況を見るに次表の通りである。

年 次	輸 入 額	輸 出 額	輸 入 超 過 額
一九〇四年	四五、五六三、九二七 <small>磅</small>	四六、三〇二、八三二 <small>磅</small>	出 超 七三八、九〇五 <small>磅</small>
一九〇五年	五一、五五九、九〇九	四五、三九一、五一九	六、一六八、三九〇
一九〇六年	六三、三三〇、六五三	六一、四八二、五五二	一、八四八、一〇一
一九〇七年	七三、〇七二、四三九	六七、七八六、八五八	五、二八五、五八一
一九〇八年	五六、四七二、二〇三	六三、二五二、九八七	出 超 六、七八〇、七八四



一九〇九年	六六、五〇六、七二八	六〇、〇三四、七二八	六、四七二、〇〇〇
一九一〇年	七一、四三三、〇七七	六四、七三四、二二三	六、六九七、八六四
一九一一年	六二、九八七、五〇〇	五七、〇三四、〇七七	五、九六三、四二三
一九一二年	六九、四六七、七七五	六四、八七一、四八八	四、五九六、二八七
一九一三年	七四、〇三八、五九八	六二、一四三、〇三八	一、八八六、五六〇

即ち世界戦争前十ケ年の間に於て一九〇四年及び一九〇八年の二回のみ金銀の輸出超過がありたる許にて其他の八ケ年間は常に輸入超過であつた。十ケ年を平均すれば一ケ年四百十三萬九千八百五十一磅の輸入超過である。

即ち英國にては世界戦争前には貨物の輸入は年々輸出を超過し加ふるに年々莫大なる海外投資をなしたのであるが、金銀塊も亦輸入超過と云ふ稀代なる現象を呈して居つた。斯る現象を呈するに至つた原因中に所謂「見へざる輸入」として英國商船の齎らす運賃の収入・保険料の収入・外國旅行者の英國に於ける消費等種々なる項目を算へられるけれども、就中英國の海外投資が齎する収益は斯る現象を生ぜしめた最大原因である。斯國の海外税資は既に述べし通り戦前には少なくとも三十七億磅に上つて居つた。而して此の投資より生ずる収益は一ケ年平均四分半乃至五分と云はれて居るから、海外投資よりの収益は先づ一億八千萬磅内外であつたと推測して差支なからう。此の収益は戦前貿易の輸入超過を償ふに充分であつた。而かも海外投資額の内約半ばは

植民地への投資であつたことを考ふるときは、植民地に對する投資が母國の經濟界に及ぼす影響の如何に大なるものであるかを充分に能く知ることが出来る。

世界戦争後に於ては英國貿易界の形勢は稍々一變した。今一九二〇年より一九二九年に至る十ヶ年間に於ける貨物輸出の狀況に就て調ぶるに左表の通りである。

年次	輸 入 額	輸 出 額	輸 入 超 過 額
一九二〇年	一、九三三、六四八、八八一 <small>磅</small>	一、五五七、二三二、六〇〇 <small>磅</small>	三七五、四一六、二八一 <small>磅</small>
一九二一年	一、〇八五、五〇〇、〇六一	八二〇、三二八、八四八	二七五、一八一、二二二
一九二二年	一、〇〇三、〇九八、八八九	八三三、二〇二、〇八〇	一七九、八九六、八〇九
一九二三年	一、〇九六、二二六、二二四	八八五、八〇一、五七六	二一〇、四三四、六三八
一九二四年	一、二七九、八四四、五九七	九三五、五一三、五三八	三四四、三三一、〇五九
一九二五年	一、三二〇、七一五、一九〇	九二七、四一七、五〇一	三九三、二九七、六八九
一九二六年	一、二四一、三六〇、二七七	七七八、五四一、八七七	四六二、八一八、四〇〇
一九二七年	一、二二八、三四一、一五〇	八三三、〇三四、一〇二	三八六、三〇七、〇四八
一九二八年	一、一九五、五九八、〇〇〇	八四三、八六二、三三三	三五一、七三五、六六七
一九二九年	一、二二〇、七六五、三〇〇	八三九、〇五一、一五〇	三八一、七一四、一五〇

斯くの如く戦後の外國貿易は之を戦前に比すれば極めて顯著なる増加を示しつつあるが、輸出に比して輸入

常に多く年々輸入超過たることに至つては依然として何等變ることがない。今戦後十ヶ年間に於ける貨物輸出入の一ヶ年平均額を見るに、

輸 入 額 一、二五九、四〇九、八五六磅  
 輸 出 額 九二三、二九七、五六一磅  
 輸入超過額 三三六、一一二、二九五磅

である。

次に金銀の輸出入の状況は次表の通りである。

年 次	輸 入 額	輸 出 額	輸 出 超 過 額
一九二〇年	六〇、六〇一、三二七 <small>磅</small>	一〇四、〇五九、四〇三 <small>磅</small>	四三、四五八、〇八六 <small>磅</small>
一九二一年	五九、九四〇、四九〇	七一、三九三、五八〇	一一、四五三、〇九〇
一九二二年	四四、六四二、〇五七	五八、〇七三、五六一	一三、四三一、五〇四
一九二三年	五三、五九七、七一〇	六九、一三三、〇六九	一五、五三四、三五九
一九二四年	四九、七一一、四五四	六一、八四二、二六八	一二、一二五、八一四
一九二五年	五二、〇七三、四五〇	六一、八三六、〇二一	九、七六二、五七一
一九二六年	四九、七四五、六一一	三八、〇八六、〇三四	一一、六五九、五八七
一九二七年	三九、五七七、五六三	三六、二〇五、五八七	三、三七一、九七六

一九二八年	五八、〇〇六、八八八	六九、七二一、四一三	一一、七〇四、五二五
一九二九年	七〇、七四三、一三三	八五、六七一、九八六	一四、九二九、八五四

前表に據ると金銀の輸出入は戦前と全然反對の現象を呈し、一九二〇年より一九二九年に至る十ヶ年間に於て金銀の輸入超過をなしたるは只僅に一九二六年及び一九二七年の二ヶ年のみであつて、他の八ヶ年は常に輸出超過であつた。即ち之を一ヶ年に平均すれば金銀の輸入は五千三百八十六萬四千三百六十七磅にして、之れに對する輸出は六千五百六十萬九千九百九十一磅に上り、差し引き一千一百七十三萬五千八百二十四磅の輸出超過となつた。

英國の貿易界が戦後に於て斯くの如き著しき變化を呈したるは何故であらうかと云ふに、戦前に比し物資の輸出入共に劇増し而かも其の増加の割合を異にしたることが主要なる原因であらう。即ち曩きに述べし如く輸入は六億六千餘萬磅より十二億五千九百餘萬磅となり、輸出も亦五億一千六百餘萬磅より九億二千餘萬磅となつて輸出入共に増加したるも、輸入の増加は輸出よりも更に甚しかつたからして、輸入超過額は一億四千四百餘萬磅より實に三億三千六百餘萬磅に劇増して益々輸出入の調和を破つたのである。加ふるに金銀の輸出は戦前に比し五千三百六十九萬九千六百〇五磅より六千五百六十萬九千九百九十一磅に増加したるにも拘はらず、輸入は却つて七千二百八十九萬八千七百七十六磅より五千三百八十六萬四千三百六十七磅に減じ、遂に四百十三萬九千

八百五十一磅の輸入超過より變じて一千一百七十三萬五千八百二十四磅の輸出超過となつた。戰後英國の貿易界は戰前と異なり貨物も金銀も共に／＼輸出超過となつた爲め斯國の經濟界は稍不安を感じるに至つた。金銀の輸入が戰後に至り甚しく減少するに至りたる原因は種々あるが、其の内最も主なるものは曩きに述べたる如く世界戰爭中に英國は或は軍事費を支辨したり或は海外諸國へ支拂をなす必要上、遂に所謂債券の動員なる非常手段に出で、海外に於ける投資を回收するの已むなきに至り、其の結果海外投資より生ずる收益額を減じたのが爲めである。而して回收したる海外投資中には植民地への投資の含まれて居つたことは言ふを俟たないのであるが、其の後外國への投資は絶對的に減少したにも拘はず植民地への投資は多少増加したるが爲めに外國貿易上より來る困難を現在の如き程度に抑へ得たのである。若し植民地への投資が外國への夫れと同様に減退したならば斯國の外國貿易上より來る困難は更に一層甚しきものとなつたに相違ないのである。又以て植民地への投資が投資國たる英國に對して如何に甚大なる價值を有して居るかを知るに足るのである。